
魔法少女リリカルなのは i's

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは i's

【Nコード】

N2521M

【作者名】

鈴

【あらすじ】

魔法を知らない主人公が魔法の世界に行ったようです。

序章

この作品は魔法少女リリカルなのはのオリキャラ重視の二次創作です。

過度な期待はしないでください。

作者は長文が苦手なのでかなり短文ですぐ場面が変わります。

そこは生暖かい目で見ていてください。

あと、作者は大変英語が苦手です。

なので、作中のデバイスの台詞は日本語で表記します。

ご了承ください。

では

＼魔法少女リリカルなのはi・s＼ 始まります。

魔法は嫌いだ…。

この世界には二つの魔法体系がある。

対人近戦闘用のベルカ式魔法

傷つけることなく制圧するミットチルダ式魔法

ほかにも、先天性のその他もろもろの魔法

他の世界、魔法の認知されていない世界では魔法はファンタジーそのものでなんでも、奇跡すら時に起こせる。

でも、少なくともこの世界では魔法はそんな奇跡みたいなものじゃなくて理論に基づいて科学的に開発され、ただ冷静に電子機器が弾き出した式を元に魔法をくむ。

そこに神秘的なものではなくて、どこまでも現実的、だからそんな簡

単に魔法《きせき》が作れるならそのうち神様だって作れそうな気がする。

でも実際そんなに世界は簡単じゃない。

（冷たい…）

でも、もし他の世界で魔法と呼ばれるものがあるなら。

（痛い…）

奇跡の魔法というのがあるのなら、

（月が綺麗だ…）

神様がいるのなら、

（とっても綺麗だ）

1つお願いしたい。

（こんなにも空が赤い。）

このどうしようもない

（いや、赤いのは月？）

この世界をどうか、

（いや、赤いのは）

この世界を殺しつくしてください。

1話 あいゝ

「暑い。」

季節は既に夏になろうとしていた。

窓の外は暑い日ざしがさんと輝き木々は青々と枝を伸ばす。

もし私が詩人とか作家ならこの風景をそう表現するだろう。でも私にはそんな文才なんてないし実際そう思ったりもしないし窓の外には当たり前の風景が当たり前のようにあるだから別段そんなことを言い出したりはしない。

「暑さで頭がやられたかな？」

朝起きたらまず顔を洗うのが私の日課。

そして毎日のように確認する異常、鏡に映る赤と黒。

ああ、私は今日も正常だ。

私の赤い瞳には光が映らない、医者に行っても理由は不明だそうだがただ別のものを映す。それは私にとって本物であり他人にとっては虚言誰も信じない。

だから私は願う。

「そろそろ時間ね。」

いつものように眼帯をつける。

これは私の異常の証、他人《せいじょうなひと》を寄せ付けないお守り。

今日も世界が平和でありますように。

- 学校 -

今日も変わらず男子は馬鹿みたいに騒ぎ女子はくだらない小声おめいこえでくだらない話をしている。

そついうわたしは教室の端で黙々と読書にいそしむ。

友達はいない、話がかみ合わない。アナログな感覚器官しか持たない人間には互いの感覚がわからない、理解できない。

それは小さなころに十分分かった。

私うちと他人おともは相容れない。

「お前まへら席に着けー。」

またくだらない一日が始まる。

部活動にも何にも所属していない私は放課後学校にいない必要がない。だからカバンを持ってすぐ帰るだけ。

今日も誰とも話さず1日が終了。

帰り道は明るくまだ日は高い、といっても下を向いて歩く私にそんなことはどうでもいい。

「こんにちは。」

不意にかけられる声。

そこにはかわいらしい少女がいた、当然知らない。

ただその子も眼帯をしていた。

どのくらいか知らない私の視界には動くものがなかったから一瞬だったのかも知れないし、もっと長かったかもしれない、それでも無言の瞬間は確かにあった。

クスッ

少女が微かに笑う

「さようなら。」

そういうと彼女は坂を下る。

でもすれちがい際に、

「アナタハモウメガサメテイルカシラ？」

そう言ったのは確かだと思う。

なんだったんだろ。

「はじめて見た。」

そつと眼帯をなでる。

私と同じ、いや違うのかもしれないけど、

結局あのまま帰って来てしまった。

「まあいいかな。」

そんなことよりさつさと下らない宿題を終わらせてしまおう。

「あれ？」

そこには教科書も筆箱もノートも何もなかった。

ただカバンの中には金属特有のキラキラした感じのものがあつた。

それは円盤状でちょうど手のひらに収まるサイズで手になじむ重さがあつた。

「これ、懐中時計…かな。」

実物を見たことがないのでなんともいえないがそれは懐中時計と呼ばれるものであると思う。付いているチェーンは多分首にかけるためだろう。

とりあえずボタンらしきものを押してみる。

しかしまったく反応がない、いくら押してもボタンは沈むだけで何の反応もない。

「壊れてる？」

まあこんなものに時間を割いても無駄だ。

結局教科書や課題は学校に忘れてきてしまったようだ。

「しかたない、」

学校に戻ってみよう。面倒だけれどそれで課題を忘れるほうが面倒だ。こういうとき家から学校が近いと便利だと思う、時間はまだ大丈夫でも歩って行くには少し難しいでも眼帯のせいで視界が右半分の私には自転車は危険な乗り物だ。

「しょうがない。」

それでも行こう。部活はまだやっているから学校は開いているはずだと思う。

上空

突然空中に描かれる文様、その文様からは一人の女性が現れた。

「シャーリー目標の位置は？」

『10時の方向距離4キロの地点、…あ、近くにも似た反応を確認合流しようと移動中合流まであと1キロ。』

「そっか、私はこのまま先行して目標の確認、捕獲を行う。後続の部隊は周辺に結界の用意をさせて、できるだけ気づかれないように」

『わかりました。』

「いくよ、バルディシュ。」

『Yes sir.』

金色の光が夕焼けの中を迷わず飛んだ。

「こんにちは。」

その少女にまた会った。しかも今度は学校しかも私の教室しかも服装はさっきのままの私服、しかも彼女は私の机に座っていてしかも彼女の手には…

「これを取りに来たのね。」

ジャラ

鎖が絡まっていてそこには私よりも小さいが懐中時計が付いていた。

「あなたは誰？」

はじめてあつた異常者^{じょうじょう}

「私はアイ、あなたは？」

はじめてあつた…。

「私は藍^{あい}。」

ブワツと開けっ放しの窓から突然強い風が駆ける。

「こんにちは。」

「あなた達を人為的連続次元震の重要参考人として拘束させてもらいます。」

突然金髪で真つ黒の服のひとが現れた。

ドクン

突然世界が揺れる。

『フェイトさん、結界設置完了これで易々逃げられませんよ。』

どこからか頭に響く

「あなたはだあれ？」

気づくと彼女の手には不釣り合いなほど大きい剣が握られていた。

金髪の人は私にちらりと視線を向けると消えた。

「まで。」

「え!？」

少女は開いた窓に手をかけた、なんといってもここは三階だから常識的にただで済むわけがない。しかし彼女は何のためらいもなく跳んだ校舎の三階から、

私は散らばされていた教科書類に目もくれず校舎を駆け下り校庭へ出た。

「え!？」

みんないなかった。何で気がつかなかったんだろう、吹奏楽部のうるさいほどの演奏も野球部のかけ声も何もなかった。しかし音が完全に消えたわけではなかった。

キン

さっきの二人が切りあっていた。空中で、重力に逆らって。
私の二つの眼はその現実離れたものを見入っていた、金色と藍色の
光が自由気ままに中を舞う様を、

2話　く紅い夢く

「まで。」

「バルディツシュ。」

『ハーケンフォーム』

戦斧の刃がスライドし金の刃を展開し鎌に変わる。

「はあ！」

「あっはははははっっ！！！」

一瞬の交差しかしその一瞬でバルディツシュから伸びる金色の刃がすっぱり切れていた。

「AMF…とは違う、なに？」

「これはねく邪魔な奴を殺すために使うの。」

弾丸のように少女が突進してくる。

「バルディツシュ、アサルトフォーム。」

『アサルトフォーム』

光の刃が消え戦斧の実刃が前にでる。

「あはっ。」

刃が火花を散らしてぶつかり合う。

『フォトンランサー』

罅迫り合いでとまった少女に魔法で作られた光の矢が向かう。

「楽し。」

剣を払い距離をとった少女は自分に向かって飛んでくる矢を見てあろうことか笑みを浮かべ手に持つ剣で矢を切り落とす。

「お姉さんもつと遊んで。」

「バルディツシュ、カートリッジロード！」

リボルバーが回転しカートリッジが煙をふかす。

『フォトンランサー』

さっきよりも数を増した光の矢が少女に切っ先を向ける。

「ファイヤ！」

「そうこなくっちゃ。」

いままで1本の両刃の剣であったのが二つに別れ片刃の剣に分かれた。

「はははっ。」

少女は増加した矢をもともせず切り裂いていく。

強い単純に強い、並程度の騎士では一瞬でやられてしまうくらいに強い。

しかも少女は飛行以外の魔法を使っていない、防御魔法すら使っていないのだ。

しかもその表情は遊んでいる子供のような満面の笑み。

そしてすべての矢が切られた、高速で飛ぶ矢全てを両手の剣だけで防ぎきった。

訂正、今までで最強の剣士だ。

「楽しいね。」

しかも飛行魔法を使うということは魔法に関してもかなりの腕があるにもかかわらずその魔法を使っていない。

「今度は私が行くね。」

少女が目の前から消える、いや、少女の顔が視界を埋め尽くしていた。

「ぐっ。」

再びひとつにされた剣の腹が無防備な腹部に打ち込まれる。

『デیفエンサ』

衝撃が緩和されるが数メートルは飛ばされる。

「遅い。」

目の前には少女の体に似合わないほど大きな剣が振り上げられていた。

とつさにシールドを張る。

『駄目です』

バルディッシュの声で気づく。しかしそれはもう遅くシールドがなにかのように剣がおり体に冷たくて暑い感覚が走った。

「あ…。」

金色の光が落ちてくるそれはさながら流れ星が落ちてくるような感じだった。

私の足は無意識に動いていた人の消えた世界で流れ星を追いかけて、ちやうど流れ星は学校に向かって落ちてきてる。多分屋上に落ちてしまっただろう。

屋上

息が乱れるここまで必死に走ったのはいつ以来だろうでも私の体は止まらず動き続けた。

屋上に着くとそれが落ちてきた。ぶつかる直前にそれは速度を弱め静かに落ち、私はその人に駆け寄った。

「大丈夫…ですか。」

金髪の女性に触れると冷たい感じがしたそれはまるで寒空にでも触るような。

「え…。」

それは赤かった。それは私の手を濡らした。

「もうおしまい？」

さっきの少女が舞い降りた。その顔にはもう眼帯はなくて金と黒の瞳が私たちを見ていた。

わたしなんてちつばけな人間いじょうだった。

だって今私の目の前にいる二人は剣なんか振り回したり飛んだり、拳句には血まみれになっている。自分の矮小さが笑えてくる。

少女の剣からは血が滴っていた。

きっと私もあれで切られるんだろうな、この人みたいに。

でもなんだろうぜんぜん怖くない。

やっぱり私は少し壊れているんだ。こんな状況なのに全然怖くない。

むしろこれは：懐かしい？嬉しい？よくわからない。

視界の片隅の放り投げられた私のカバン

それから飛び出す鎖

無意識に私の手は伸びつかむ

「i”起きなさい”

私以外の何かが私をつき動かす。

『何だ、死にたがり。』

「起動。」

『了解』

今まで開かなかった時計が開く。しかし、開いても結局は普通の時間のあつていない懐中時計であった。

『Setup Ready』

手に持つ懐中時計の感覚が消え、代わりに手には1丁の銃が収まる。なぜだろう、初めてのはずなのにとても懐かしい。

これがデジャブというものなんだろうか？

わからないまま何かに突き動かされる私は自分で眼帯をはぎとった。

「目が覚めた？」

「：最悪。」

少女は剣先を向ける。その剣にはきれいな藍色の光を纏っていた。

気持ち悪い 気持ち悪い 気持ち悪い 気持ち悪い 気持ち悪い

「その気持ち悪い色を消してくれない。」

「すごい、見えるんだ。」

銃口が火を噴く。

銃口からは白い魔力弾が少女目掛け射出される。

「あはっ。」

剣が振り下ろされ魔力弾が切り裂かれる。

「i。」

私は一気に踏み込み振り下ろされた剣に銃ではなくギザギザの剣をかみ合わせた。

「目障りなその色を消してくれない。」

少女はほうけた顔になっていた。その顔が更に私の心を不快にしていく。

「あはっ、強いね。」

不快な音を立て剣が折られた。

少女は折れた剣を未練もなく捨て去る。

「楽しい。」

下がった少女の周りには藍色のナイフが私を向き並んでいた。

「行け。」

短刀が一斉に私めがけ飛ぶ。

「i」

今までギザギザの刃であった刃物が一気に変化し、トリガーガードからグリップにかけて片刃の剣が装備された二挺の拳銃に変わっていた。

私はそれを放ち、振る。それは感覚だった。悪く言えばでたらめ、目に映るナイフをただがむしゃらに撃ち、切る。

防御の必要がない。

それは魔力の浪費。

私がナイフの相手をしている間に少女はまた手の内に物を収めていた。

「こんどは強いよ。」

少女が出したものは2、3メートルはありそうな槍

私は狙いを定め魔力弾を放つ。

少女の槍はそれを苦もなく貫く。

「また同じ手？」

「うん、違うよ。」

少女は更に別の槍を出しそれを私に向けて投げる。

それを私は…

『回避』

遅れた衣服が槍に巻き込まれ破れる。

槍の後ろにつくように槍を構えた少女がいた。

金属のぶつかる音をたて剣と槍が交差する。

「本当に不愉快。」

「すごい、みんなあれを防ぐのに。」

さつき投擲された槍には特に魔法を消す効果はなくただの槍が高速で飛来するだけ。

しかし高速、危険なことは変わりない普通なら回避などせず魔導師ならシールドを展開して防ぐだろう。

しかし彼女の持つほうの槍は魔力を消す。

魔導師の基本は彼女にとってはむしろ都合。

「魔導師殺し。」

「あはははっ、そうだよ。」

始まる高速の切りあい

斬る、突く、払う、薙ぐ、撃つ、

何をしたかはどうでもいい。目の前のものの流れを見て瞬時に対応

(不思議…なんだか懐かしい、)

矢先が髪を梳く。

(私はこんなことを日常としていたのだろうか?)

開いたところにほぼゼロ距離射撃

(わからない、しかし体は勝手に動き出す)

しかし槍の柄が阻む

その柄が私に向かう

私はそれを交差した刃で防ぎ、二人の間が開く

「あっははは、楽しい。」

少女は手を掲げるその手に何かが集まりだす。

(さつきから見えるこれはなんだろう)

もやもやした煙みたいでキラキラしたきれいな繊維が風になびくような感じ、とても言葉では形容しがたい感じ、

そんな感じのものが形を作り始める。

(カチャリ…)

それを見ていた私の頭に金属の擦れ合う音が響く。

私は何が起こるのか知っている。

あの左手に集まるものは何か、少女は何をしようとしているか、それら全ての情報が私の脳内を高速で駆け回る。

「行つくよ。」

それは異様なもの、少女の左腕が取って付けられたかのように、

(知ってる…)

巨大な腕が存在していた。

「それ〜。」

その手が振られる。

回避不能と私の頭がサイレンを鳴らす。

「カはアツ。」

息が肺から漏れ、体が跳ね、身体中が痛む。

腕には魔力の無効化能力がなかったのかとつさに出したシールドではほんの僅か動きを鈍らせることができたしかしその圧倒的な威力ではシールドは紙の同然、役になど立たない。

だが、その一瞬のおかげで致命傷だけは免れたがこれでは別にやらなくても一緒な気がする。

屋上の周りに立てられたフェンスをへこませたところで私の体の疾走は止まった。

身体中が痛むがもう動けないというほどではないようだ。

丈夫な体を少しばかり感謝した。

「くッ…。」

痛む体を起こすと少女は驚いていた。

「まだ、動けるんだ…。じゃあ、もつといくね。」

新しいおもちゃを手にしたかのような笑顔
動作のため構える少女の左腕は未だに異様な甲冑

しかし今度は左手に槍を持っていた。当然異様な左手に見合った長さの…。

ただ手を振るだけでこれほどなのだからあれを受けたらひとたまりもないだろうな、

（カチャリ…）

また金属のする音

既知感とでも言うべき違和感

振りぬかれる槍、死はもう目の前、走馬灯等見えない。
なぜなら、

槍は私の数十センチ前で止まっていた。まるでその空間に固定されているかのように、

「はは、つつ…。」

少女の口から笑いがあふれる。

それがなぜなのか私にはわからないし、巨大な手のせいで見えないせいで表情から推測することもできない。

ただ現在の状況を簡潔に言えば槍に錆び付いた鎖が絡まっていた。そして鎖を辿ると大きな腕

少女の左腕のような大きな腕が空間を割って生えていた。

「使えたんだ…。」

わからない、これが何なのか、何をどうやったのか、それら何もかも。

私はただ本能に従うように何も考えていなかった。

いや、頭の中が真っ白と言ったほうが正しい。

まるで起きぬけのよう、まだ夢の世界を漂っているような感じ。

「…え、…私、帰るね、バイバイ。」

少し寂しがる少女の声

声につられ腕が消え去り同時に向こう側にいたであろう少女も消えた。

悪い夢だ、こんな夢を見るなんて今日はついてない。

遠くに聞こえる掛け声止まっていた時計が動き出した感じ。

足元が崩れる、いや私の足が力なく折れただけだ。

痛い…これはどうやら夢ではないようだだってこんなに体が痛む
疲れた、疲労の性が瞼がすごく重い。

赤い空これ以上に紅い空を見たことがある気がするがここまできれ

いではなかった気がする。

そもそも私は空を眺める趣味なんてない。

限界に近いまぶたの間に鏡写しのような私がいた。

違いといえば彼女は色をなくしたかのように白かった。

何か言っている？

彼女の唇は動くが音は私の耳まで届かない。

何を言おうとしているんだろう。

私のまぶたはついに力尽き閉じた。

3話〱各々〱（前書き）

少しバイオレンスなところがあります。
苦手な人はお控えください。

3話　各々

「フェイトさん、本当は無理しちゃだめなんですからね。」

「わかってるよ、シャーリー。ところで容疑者は。」

「はい、フェイトさんと対峙した少女は包囲網を破り逃走、完全に取り逃がしました。もう1人の方は…。」

シャーリーと呼ばれた女性の前に1つのモニターが表示される。

そこは1つの部屋生活観も何もかもがなく部屋としかいえない場所が映されていた。

画面の端のベットだけが微かに動いている。

「意識はまだ戻りません。ですが医務室からなんら異常は無いそうです、デバイスのほうは今ラボのほうで解析中です。」

「そう、逃走した方が使っていたものは、」

「そちらの解析は済んでいます。」

モニターが変わり今度は折れた剣が映されている。

「基本構造は普通のアームデバイスと変わりませんが一部通常とはことなる技術が使われています。」

ウィンドウが増える。

「以前のJ・S事件の折のナンバーズの使用したインヒューレントスキルや、魔力弾ライフル等のようにエネルギーを流すと固有の事象がおきる構造です。」

増えたウィンドウに剣の詳細と類似の構造図が対比される。

「これなら誰でも簡単に使えるため実際にいくつか使われていますが、ただ動力源は魔力で剣に魔力無効化を付加させるというのはちよつと…、ラボで試験的に使用しましたが魔力の消費が激しく実践向きではないとのこと、あとフェイトさんが意識を失っていた最中の二人ですが…、」

画面が切り替わる。

画面は空から見下ろすように二人を映していた。

ただそれを二人と言い切ってしまうのは疑問が残る。

異形の腕、事象は違えど同様のことが起こっていた。

「おそらく召喚系の物質操作系かと…、ただミッド式でもベルカ式でもないようで、詳細は不明です。…今ところはこれぐらいですね。」

「でも、尻尾はつかんだ。」

彼女が担当している事件

「…連続魔導師襲撃事件」

動機不明

ただ魔導師が襲われている内容を簡単にまとめてしまえばそれだけの事件

大なり小なり怪我はするが死者はいない。

ただ一方的に襲われる、通り魔のような事件

だが、問題なのは被害者に共通点はなく、あるとすれば襲われた人は総じて魔導師ランクが高い、魔法の素質が高いなどで、管理局所属のエース等もその中に入っていてその被害者の人数、犯人の目撃情報が皆無ということ。

更に管理外世界でも魔法の素養があるものが襲われるということがおきていることが数件判明したため、もしかしたら関与しないものも多数あり抵抗のすべが無い管理外世界では死人が生まれているのかもしれない。

だとすると大規模テロ事件のJS事件なんかよりもずっと性質の悪い事件だ。^{タチ}

部屋

目が覚めたら私はベットにいた。

まだ頭がボーとする。

私は狭い部屋に寝させられているようだ。

ベットに脚が固定された机だけの灰色の立方体。

初めての景色しかし懐かしさも感じる。

そんな自分が

「気持ち悪い。」

元々自分が好きではない私にとってそれは当然、ついでにさっきの出来事が気味悪い。

「…ここ、どこ？」

さっきのが夢なのならどこから夢？

何でこんなところに私はいる？金属製の壁に囲まれた部屋等あるのか、こんな部屋まるでなにかを閉じ込める部屋ではないか。

清潔感あふれる部屋、しかしそこには生活感はない、小奇麗な物置、そんな感じ。

とりあえず出なければ。体に鈍痛が走り体が言うことを利かない。

私はベットから落ち這うように目先の扉に向かう。

ズリズリ

私は金属製の床を這う。冷たさが文字通り肌に感じる。でもそのおかげで頭がはつきりと働く

どうやら私は誰かに運ばれたようだ。

服が制服から簡素な見慣れない服に変わっている。

その服を一言で表すのなら。

CＴスキヤナ？に入れられるときの服。

つまり私は意識のない間服を交換され何らかの医療行為なのかは不明だがそれに類することをされこのベットに寝かされたということだ。

私はどのくらい眠っていたんだろう。

状況がわからない。

歩いて数歩の距離が脚に力が入らないせいで無駄に時間がかかる。

もう少しあと少し。

そのとき扉が開いた。

扉の向こうに人影

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。あなた立てる？」

蛍光灯の光を受け見せる色は金。

流れ星の人だった。

片腕がぶら下がっている。

あれは夢ではないのだろうか。

その後白衣を着たたくさんの人が来た。

たくさんと言ってもこの部屋に入りきってしまうのだから実際はそんなに大した人数じゃなかったのかもしれない。

よくわからない機械が台車に乗せられ私に色々貼り付け計器を見たり身体測定程度の簡易的な検査を受けた。

それらが終わると白衣の人は部屋を出て行った。

「疲れた？」

ただ一人金髪の人だけが残った。

「いいえ、別に。」

「早速で悪いけれど、あなたの名前は。」

顔自体は微笑んでいるが瞳には校舎に入り込んできたときに似た強さがあつた。

「…水無瀬 藍。」

「ミナセ、アイ？」

私はその問いに首を振ることで返事をする。

「あなたは魔法を信じる？」

マホウ？この人は今マホウと言ったか？

その目は変わらず真剣そのものの、だから私も目を逸らさず答える。

「御伽噺のようなものですね、でも今なら信じられると思います。

似た夢を見ましたから。」

これは率直な私の意見だ。

「では、あれについては、」

「…私は知りません。ただ夢を見ている。そんな感覚でした。」

本当にどこから夢だったのか私が知りたい。

あれ自体全部が夢であったと言っくらいなのだから。

タイミングを計ったように扉が開くその向こうには藍色を基調とし

た制服の人白衣を着ていないから先ほどの人たちとは違うようだ。

「フェイトさん解析終わりました。」

「ありがとうシャーリー。」

シャーリーと呼ばれた人の手からこぼれる鎖

…あああ。」

それは見覚えがある。

その鎖の先に…。

「あああつああ。」

激しい頭痛

頭が重いつか、気分が悪いとかそういつた程度ではなく本当に頭の奥に高圧電流でも流したような痛み。

痛みでピントが合わない。金色の何かが話しかけてくる。

「…*||&& a m p ; % ? * !」

何を言っているのかわからない、聞こえてはいるがそれを理解できない。

その音に意味を見出せない、置き換えられない、うるさい雑音ノイズにか聞こえない。

理解できない、理解できない、理解できない。

理不尽な痛み。

その中私の視界に入り込むもの、それだけは私のピントに合っていた。

鏡写しの私

色を忘れた私

唇が動き音を紡ぐ。

その言葉だけが私の中で意味を持った。

ごめんね…

彼女はただ無表情に涙を溢れさせてそういった。

駆け込む白が私たちの間に入る。もの凄い力で押さえ込まれる私。一瞬の痛みを感じ私は暗闇に落ちた。

「フェイトさん。」

急に暴れだした水無瀬 藍と名乗る少女。

「原因はこれかな。」

シャーリーの手の内から垂れる鎖。

「フェイトさんの指示通りこれを持って来ましたが。」

金色の古めかしい懐中時計。

「彼女は多分白、だけど…」

「この懐中時計の解析結果ですが、どうやら解析不能のようです。」
「解析不能？」

「内部構造を見ようにも各種スキャナーで内部構造が把握できず、解体しようにもできないようです。」

懐中時計のふたは開く気配がない。怪我のせいで片手というせいもあるのだろうが蓋は開かない。

「理由は不明ですが、開けるには何らかのアクションが必要ではないかとのことです。」

「一応これは保管庫にしまっておいて。」

「わかりました。それとフェイトさんけが人は休んでくださいね。」

そのとき私の頭では色々な考えが巡っていた。

魔力を打ち消す剣

それを振るうおそらく能力的にオーバーSランクの少女

そして彼女のバックにいるであろう人物、ないし組織。

この事件簡単には終わらない。

それが今まで執務官をやって培った私の勘がはじき出した答えであった。

「…なのはに連絡入れといたほうがいいかな。」

今回も遅くなる…って

そこは新しいようで古めかしい空気が漂っていた。

「ただいま。」

そこを場違いなかわいらしい少女が赤と黒が半々で迷彩服の様な模様の服の裾をはためかせ駆ける。

「待ちなさい。」

その少女を呼び止める声。

「もう、さつき着替えたのにすぐ汚して…。」

声の主は黒を基調とした服を着ていた、服の端々にフリルが飾られ可愛らしい装いだ。がその装いは従者のもの、簡潔に言ってしまうばメイド服と呼ばれるものだった。

だがそれよりも彼女の装いは目に止まるものがあつた。

首輪、異様に大きく日常生活を阻害するのではないかという大きさで金属製の質素なデザインは明らかにそれが装飾品の類でないことがわかる。

だからなのか彼女はメイドというより奴隷に見えてくる。

「だつてだつて…。」

少女が駄々をこねる姿は年相応でなんとも可愛げがあつた。

「だつてじゃない、ほら着替えに行きましょう。折角の黒い服が台無しになつてしまうわ。」

メイド服の奴隷は少女の手をとり奥へ行つた。

きつとここに普通の人間がいたら声を発することもできなかっただろう。

もしかしたら気が狂つてしまうかもしれない

悪ければこの空間に脚を踏み入れたその瞬間に胃の中のものが逆流してしまふかもしれない。

古めかしい廊下に行く風は無く留まるこの臭いはどこにでもあつて、普段嗅がない臭いが満ちていた。

きつと誰もが知っている臭い。

少女の歩つた後には変色しかけた紅い雫が点々と続いていた。

そんなところでそれが当たり前であるかのように二人はそこにいた

の
だ
か
ら
…
。

4話　静かな暮れ

これは夢なのだろうか。

私はどこだかわからないところに立っている。

正確には、霧の中に立っていてここがどこだかわからない。と言いなおした方がいい。

足元は見える。

ジャリ：

靴が地面の砂利を擦る。

周りを見渡しても何も見えない。

見えるのはざつと5、6メートルといったところか。

ツンツン

とつさに跳ぶ、

夢の中でまさか突かれるとは思っていなかった。

そこには“私”がいた、色素を忘れた“私”が今にも「やつほ」なんて言いだしそうなフレンドリーな笑顔を私に向けていた。

「なに？」

いままで、彼女を見たときはとても悲しそうな顔をしていたから私はとつさにそんなことを言ってしまった。

『酷いな、なにはなくない。』

彼女が唇を動かすと直接頭の中に声が響く。

まるでテレパシーを使っているような感覚。

いや、違う直接意味が伝わる、まるで考えていることがそのまま頭に入り込む感じ。

「あなた何。」

『これまた、なにとはほんと酷いな。』

今までの感じとは180度変わった印象、なんと言うか今風。今までは全然違う

『でもさ、ごめんね：はは、謝ってばかりだ。』

だがその表情は正しく彼女なのだという事を証明した、見慣れた悲しそうな表情。

「あなたは何で謝るの？」

「うーんそれには色々と浅く狭い話があるんだよ。」

彼女はははと情けない顔で笑い声をもらす。

「あなたは何なの。」

単純な疑問

私の日常が崩れたとたん現れて謝罪をする彼女。

「うーん、なんて言えばいいのかな。…同位体？、まあ私はあなたでありあなたは私である。…って感じかな。」

わけがわからない。

「ふざけてるの。」

「いえいえ、滅相も無い。」

彼女の仕草がいちいち私の癪に障る。

「ならここは何なの、あれは何だったの、あなたは何なの、あなたは…。」

湧き上がる疑問や不安が私の中で荒れ狂ってあふれ出たものが言葉として彼女に向かう。

これは単なる八つ当たりだ。

そんなの分かりきっている、あんな下らないと思っていた日常が今はとても恋しい。

一度壊れたダムは流れる水を止めることはできない。

もう無関係なことにまで私の言葉は及んでいた。

彼女はそれに対して、

ただ聞くだけであつた。

何も答えないのが腹ただしかった。

解答の暇すらないのだから当然だ、でも私は気が回るとかそんな周りに配る気を一片も持ち合わせてはいなかった。

止めどなく続く言葉が途切れる。

息が切れた。こんなに言葉を発し続けたのは生まれて初めてかもし

れない。

『…ごめん、』

またそれだ、彼女は何に対して謝罪しているのだろうか。

「もついい。謝らないで、まるで私があなをいじめてるみたいでしょ、…とにかく質問に答えて。」

『…もう無理かも。』

落ち着いた私の怒りがまたメーターを振り切る。

「…どうして。」

『ここは夢の中、あなたは起きてしまう。大丈夫、また話すから。霧が濃くなり“私”すら見えなくなり意識が薄れる。』

起きるというより眠るみたい、

そして私は眠^{おきた}った。

「失礼します。」

そういつてシャーリーが入ってくる。

「彼女の精密検査の結果報告書をお持ちしました。」

そういつて手渡される金属のスティック。

そこにあるボタンを押すと画面が立体映像のように表示される。

「各種数値は特に問題ないようなのですが、医療班から何か妙だとの報告です。」

資料を流すように確認していく。

「はい、特に怪我の治りが早すぎるそうです。」

「怪我？」

彼女はそんなに酷い怪我をしていたのか、

「はい、フェイトさんと同じかそれ以上の、詳しくはわかりませんが何でも骨折がもう治り始めているとか。」

「え？」

耳を疑った。

骨折がもう治り始めている。

「シャーリーあれから1日も経ってないよね。」

「そうですね。」

確かに妙だ、魔導のある世界でだってそんなことありえない。

「シャーリー、今の彼女の監視は。」

「はい、今は特に監視している人はいないので、録画ですかね?」

「シャーリーここので開いて。」

「わかりました。」

席を譲りシャーリーが高速でタイピングを始める。

数秒後に1つの映像が流れ始める。

「フェイトさん...。」

「うん、」

その映像はある1つの部屋

何もない部屋

だがそこにはあるものが確かなければならないものがあつて、しかし今の映像にはそれが映っていなかった。

「緊急事態、私は保管庫に行く、シャーリーは彼女がいつ消えたか調べて、あと艦橋に艦内の搜索を、艦内だと思っけどもしものことがあるかもしれないから一応武装班に彼女の搜索の用意をお願い、それと武装班に...をお願い。」

「え!フェイトさん本気ですか。」

「うん、小さいものでいいから、この艦にもあるよね。」

「それはありますけど、」

「もし、彼女がまた出てきたらそれこそ問題だから」

「わかりました。一応許可なくの使用は禁じておきますね」

「ありがとう、シャーリー。」

そこは見覚えのあるところ

私の部屋

今までのことは夢だったのだろうか、

「時間……。」

枕もとの時計を取る。

P M 18:46

愛用のデジタル時計はそう表示していた。

どのくらい眠っていたのだろう。

たぶん学校が終わってすぐかな、まあ明日はどうせ休みだしもうちよっと情眠をむさぼっても問題はなかったかな。

「汗掻いたかな。」

少しべとべとした感じがする。

夏に昼寝をすると大抵こうなってしまうのはどうも好かない、かといって冷房を入れたままだと逆に冷え込んでしまつて風邪をひいてしまいそうになる。

「ッ！」

起きようとする体中が痛んだ。

これはおかしいいくらなんでもそんなに寝ているわけがない。

壁に手を当てまるで入院患者のようにして私は浴室に向かった

扉に手をかけ開ける

視界に飛び込んだ洗面所の鏡を見て私は自分の姿に違和感を持った。

「眼帯……。」

いつもしているはずのものが無い違和感

まるで普段眼鏡をかけている人が眼鏡をかけていない、それに似た違和感があった。

「どっかに落としたのかな。」

どの道あんなものなくしたところで拘らなければ最近は一〇〇円もあれば買える。

そんなことより今はこの気持ち悪い感じをどうにかしたい。

「アイが1STを発見した模様です。」

「そう、」

「どうでしょうか？」

「彼女ならいいよ、見つけたのなら見失わないようにすれば。」

「承知いたしました、監視、保護を続行します。」

そういうとその声の主はスイッチを切ったかのように一瞬でその気配が消え去った。

「…もうすぐ始まるかもしれないな、今回の彼女は一体どんなのかな。」

「ねえ、極夜」

小さな少女が廊下をトテトテと走る。

「アイ、淑女は廊下を走ってはいけませんよ。」

「はい、ねえねえ極夜もお出かけ？」

「はい、なのでしばらく私はいませんがアイはよい子にしてください。」

「はい。」

5話　騒めき

スーパーはいつも通りだった。

違いなど買い物をする人たちが毎回違うというぐらいだろう。

でも行きつけだけ談笑するおばさんや、レジが遅くてイライラさせる店員と見知った顔がいる。

その変わらなさに少し安堵した。

「魔力探知ではこの街に絞るのが限界です、これ以上は精度の限界のため不可能です。」

いくら高性能とは言えこの距離ならば数キロの範囲に絞れるだけ御の字なのだろう、

後は人海戦術局員に任せるしかない。

彼女は元々この世界の住人つまり魔法といったものを知らない人間だ。

きっと彼女にとってはリアルな夢を見たと言いたいことなのだろうけど半自律型のロストログアと思われる物騒なものを所持しているのだから私達にとって危険な存在には変わりない。

それは逃走した少女も同様。

「03A分隊より報告対象らしきものを確認、モニターに出します。」

画面に表示されていた地図には記号などではなく道と建物の二つしかあらわしていない粗末なものであった。

その地図の中いくつもの光る点が明滅していた。

明滅する複数の点の内一つが拡大される。

街中の大通りに面した建物のところにその光はあった。

「画像出します。」

地図の上に画素の粗い写真が映される。

画像は交通量の多い大通りを写したもののようで時間带的にもかなり人の行きかいが多く、道路も歩道も溢れるようだった。

その中歩道を歩く人が拡大される。

「…、」

画像が粗い性で断言はできないがその人物は数時間前までベットに横たわる重傷者のはずであった。

「各班に到達、03Aは監視を続行、他の班には帰艦命令を」

通信士がその旨を各班に伝えたと元に戻った地図の光がひとつを除いて動き始めた。

「シャーリー、私は現場に行く。」

「分かりました。でも無理はなさらないください、応援はまもなく到着の予定です。」

「なのはほど無理はしないよ。でも、彼女がまた来たらどうなるか分からないけど。」

1番の不安要素は逃走した彼女、今まで確認された犯行からして単独とは考えにくいそれに何故襲撃がアレほど容易に行われてしまっていたか。

「もし、彼らがあのロストログアを狙っているとしたら、」

その所有条件が優秀な素質ならば…

「そして、もし彼女が当たりならば、」

勘が告げる。

「もう1度来る、私たちが彼女を確保する前に、」

彼女の周りにはもう人がいなかった、寧ろ回りに足場などないに等しい。

何故なら彼女は一際高い建物の上に設置された給水タンクの上に立っている。

さっきの人間は騒ぎが起きない程度に御相手した。

「あれはシクリましたね。人間に触れられるなど。」
帰ったら即体を清めなければ…、

「…流石管理局早いですね。」

魔力が1点に集中し始めている。
しかも彼女の位置に近い。

「身柄を押さえる気ですか、」

だとしても動くわけにはいかない、今気づかれるわけにはいかない。
しかし結界を張られても困る、しかしかなり近づいてしまったらそれはそれで気づかれてしまうだろう。

「戦力もかなりありますね。」

概算で武装隊がフォーマンセルないしスリーマンセルで8〜12分
隊程度

集結すれば1個中隊程度になる。

「まだ知られるわけにはいかない、でも管理局の手中では…。」
その時タイミングよく通信が入る、送信者は…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2521m/>

魔法少女リリカルなのは i's

2011年10月7日08時13分発行